

教材のチカラ

「絵本で多読を」

—絵本の教材化—

Lost and Found (Oliver Jeffers), Badger's Parting Gifts (Susan Varley) など

佐々木 忠夫

(ささき・ただお 宮城・小牛田農林高等学校)

1. はじめに

教科書の教材はそのほとんどすべてが説明文である。一方で物語文は最後に1つか2つあるだけだ。

しかし、これはもったいないことであると同時に、偏っている。文章には説明文と物語文がある。そのうちの片方しかほとんど教えられていないのだ。正すべきことではないかと思う。

説明文と同じ量の物語文を読ませたいと私は思う。生徒が感想を書いている。「英文で“アナグマ”の物語について訳しましたが、教科書の内容をするより、物語について訳すほうが、私的には楽しかったです」。

2. 教材として絵本のおもしろさ

絵本の文章は短い。1語1語大切に選び抜かれた言葉が詰め込まれていて、その分だけ凝縮されている文章である。それは日本語の絵本でも同じである。だから子どもたちは絵本を何度も読みたがり、何度も読み聞かせを求めたりするのだろう。それが英語の絵本は英語学習に最適の教材であると私が考える理由である。

また、絵本には当然のことながら絵があって文

章がある。絵と文章の相互作用によって成り立っている。1語1語が、1文1文が絵と結び付き心に残り、忘れ難い物語を作っている。また、ちょっと複雑な文章でも絵があることで理解を助けてくれる。

柳田邦男は多くの著書で「大人こそ絵本を」と言っている。その人の経験に合わせた読みが可能なのである。当然、高校生にとってもその経験に合わせた読み方ができる教材となりうる。

3. 絵本を教材に新しい多読を

教科書以外の英文をもっと読ませたい、物語文をもっと読ませたいと思っても授業の中で時間を取ってまでなかなかできないのが現状である。そこで、多読教材として、主に授業以外で読めるようにしたいと考えて、現在の絵本の教材化を行ってきた。

そのためには英語の苦手な子でも取り組めるように、元岐阜大学教授・寺島隆吉氏の考案した記号付けプリントにした。単語の意味をすべて与えたヒントをつけた。生徒はそのヒントを自分の力に応じて利用する。すべてを利用していたら、読むスピードが落ちてしまい、読む楽しみが半減してしまうからだ。

一般的な多読であれば、わからないところは飛ばして読む。しかし、わからないところを飛ばしてしまうと、物語の流れがつかめなかったり、あまりにもそれが多すぎたりすると、読むこと自体を楽しめなくなり、止めることさえある。

生徒たちの感想を見ると、最初は「やりたくない」「面倒だ」と思っていたものが、読んでみると「楽しかった」「もっと読みたい」「達成感がある」などに変わっていく。

このように読んでいくと、1年間で相当量の英文を楽しみながら読めていく。いつの間にか英語が読める喜びを感じられ、長文を読むことへの抵抗感がなくなっていく。

4. どんな絵本を読むか

この1～2年で読んだ絵本の作品をいくつか簡単に紹介しよう。

まず、*Lost and Found* である。ある日男の子の前にペンギンが現れる。男の子は迷子だと思っ、なんとか家まで返してあげようとする。嵐を乗り越え、南極までボートを漕いでいく。その中で2人(?)に友情が芽生えていく。

次に *The Polar Express* であるが、トム・ハンクスによって映画にもなっている。クリスマス・イブにサンタクロースを信じられない少年の家の前に突然蒸気機関車が現れる。ほかの少年少女と一緒に北極点へ行き、サンタクロースから特別のプレゼントをもらう。

3つ目は *The True Story of 3 Little Pigs* である。ご存じ「三匹のこぶた」の話であるが、オオカミ目線のお話である。ちょっとおかしいが、もの見方は一つではないことを教えてくれる。

4つ目は *Badger's Parting Gifts* である。年老いたアナグマはみんなに愛され、信頼されていた。しかし、ある日死んでしまう。みんなは悲しみに暮れるが、アナグマが教えてくれた様々なことを話すうちに、少しずつその悲しみが消えていく。身近な人が亡くなった悲しみを乗り越える方法を教えてくれる絵本である。

どれも子どもだけでなく大人が読んでも、その人の経験に合わせた読みが可能な作品ばかりである。

5. 実践

教科書を終わらせるだけで精いっぱいではあるが、どうしても、読ませたい。そのためには、長期休業やゴールデンウィークなどを使ったり、週末を中心に1ヶ月単位で1つの絵本を読むようにしたりしている。

実践は基本的に次のように行っている。

(1) 記号付けプリント

英文を記号付けプリントにする。動詞を○で囲み、前置詞句を[]、従属接続詞(含む関係詞)を□で囲み、その節を[]で囲む。当然、1枚1枚のプリントには絵本からの絵を入れる。

(2) 映像資料を見る

そして、英文を読む前には、あらかじめわかるように映像資料を視聴する。有名な絵本であれば、

YouTubeに読み聞かせの映像がアップされている。英語版だけでなく、日本語版がある場合もある。それをまず生徒に見せる。また、*The Polar Express* のように映画になっているものは、それを見る。

(3) 授業の中で読む

その後、授業を1～2時間取って、冒頭の部分をみんなで読んでいく。この時間がとても大事である。これを行うことで、物語の面白さが、生徒が1人で英語を読み進める後押しをしてくれるからである。これからどうなっていくのだろう。何が起こるのだろうか。そんな思いが、どんどんと読み進める力になる。ここまでくると、残りは休み中に1人で頑張って読むことができる。

(4) 読解の確認としての感想文

読了後は時間を取って何かをすることはあまりできないので、感想を書かせることにしている。

6. 昨年度の2つの取り組み

昨年度の実践から2つを紹介する。

(1) *Lost and Found* (Oliver Jeffers 作)

ゴールデンウィークには、1年生で *Lost and Found* を読んだ。

まず1時間は、この作品をベースにしたアニメ映画を視聴した。ナレーションが英語だったこともあり、最初はざわついていたが、生徒たちはその主人公の少年とペンギンの可愛さと物語のおもしろさにすぐに引き込まれていった。嵐を乗り越えて、南極に到達するところには友情に感動しながら見ていた。「おもしろかった」という感想が多く聞かれた。

記号付けプリントを使い、1時間を取って冒頭部分をみんなで読んでいった。総枚数がA4判18枚である。それを一度で渡してしまうと、その量の多さで取り組み意欲をなくす生徒が多い。そのため、最初はみんなで読み進める。

この1時間で5枚程度は読んでしまい、物語が展開していき始めるところになる。おもしろさも増すことになり、「残りはゴールデンウィーク中に読みましょう」と言っても大丈夫なのである。

ゴールデンウィーク終了後、課題と一緒に感想

文を提出してもらおう。感想文には「2人(?)の友情がよかった」「おもしろかった」「続きが読みたくてどんどん読むことができた」「もっと読みたい」「達成感があった」などの感想が多い。

その後、内容確認の問題を解いてもらった。最後に、物語の進行とともに、ペンギンを表す言葉が it から he に最後に his friend と変わっていく、その理由をみんなで考えた。

(2) *Badger's Parting Gifts* (Susan Varley 作)

3年生に対しては、冬休みに *Badger's Parting Gifts* を課題とした。これは生徒が記号をつけながら立ち止まり訳(フレーズ訳)をしていく形式のプリントにした。

最初の1時間で YouTube の読み聞かせの映像を視聴した。これは日本語と英語があるので両方を見せた。それぞれ10分程度である。

日本語でストーリーをすでに知っていることは読み進める力になる。知っているからこそ英語で読んでみたいという気持ちにさせさせる。

そして、読み聞かせが終わっても30分以上時間があつたので、早速、読み始める。こちらはA4判で18枚(記号付けプリントにすると30枚分)である。この時間で2~3枚を読了した。残りは冬休みに読むことになる。

これも読み聞かせの映像と休み前に2~3枚読んだことで冬休み終了時にはほぼ全員が読了できた。

こちらは日本語で感想を書くだけでなく、英語で感想を書く課題も付け加えた。

感想文を読むと、「最初は長くて読むのが大変そうだと思っていたけど、訳をしていくうちに、小さい頃読んでいた絵本を思い出すようなストーリーだと感じ、どんどん読み進めることができました。」とあり、ストーリーの力強さで読み進めていっているのがわかる。また、「『忘れられないおくりもの』を読んで、自分の祖父が亡くなったときのことを思い出しました。祖父の死はとても悲しく、実感もわきませんでした。しかし、日々が経つにつれて祖父との思い出を思い出し、今ではそれが私の励みになることもあります。」と自分の体験を重ねて読んでいる生徒もいる。多くの生徒がアナグマ

と動物たちを、自分と他者とのかわりに重ねて読んでいる。

7. おわりに

平成25年度に実施した際に、英語の力がどのように変化したかを、自由記述で生徒に書かせた。「和訳ができるようになった」「読解力がついた」「読む速度が速くなった」という感想が半数以上だった。「語彙が増えた」と感じた生徒が8割を超えていた。

また、同年の「みやぎ学力状況調査」では、前年度と比べて成績が全体で6ポイント上昇し、特に長文読解と文法・語法分野で10ポイント以上上昇した。さらに長文読解は県平均を5ポイント以上も上回っていた。これも絵本による多読の成果ではないかと考えている。

クラッシュェンが『自由読書』が第2言語の習得にびっくりするほどの効果があった。」と『読書はパワー』(長倉美恵子・黒澤浩・塚原博訳 金の星社)で言っている。また寺島氏は「最近の言語習得研究では、『苦行道』で学習した内容は脳に定着しません。楽しみながら学習したものだけが、脳に定着するのです。」と『センとマルとセンで英語が好き!に変わる本』の中で言っている。上の生徒の感想や「みやぎ学力状況調査」の結果と一致しているように思う。

現在、絵本の多読教材は10作品を超えている。生徒に読ませたい作品はまだまだあり、教材化をしていきたい。そして、楽しみながら英文を読むことで、英語学習が「英語楽習」になればと思っている。

(参考資料)

『読書はパワー』クラッシュェン、金の星社

(長倉美恵子・黒澤浩・塚原博訳)

『センとマルとセンで英語が好き!に変わる本』

寺島隆吉著、中経出版

Lost and Found by Oliver Jeffers

The Polar Express by Chris Van Allsburg

The True Story of 3 Little Pigs by Jon Scieszka

Badger's Parting Gifts by Susan Varley